

感情による支配…ルソーにおける閉じた共同体

吉 永 和 加

現代、他者経験とは何か、共同体の基盤をなすものは何かが哲学・倫理学の問題となる際、「感情」はその決定的な要素の一つとされる。それは、例えば、サルトルの恥の感情であり、シェーラーの共同感情であり、さらにはミシェル・アングリの共―バトスである。彼らにとり、感情とは、他者経験の端緒であり、その意味で初めから他者との共同性を帯びるもの、さらには生命に起源をもち、あらゆる生命への共感を開くものである。⁽¹⁾ルソーの場合も、感情は人間同士を結びつけ、社会を形成する基盤と考えられている。有名な「不平等起源論」での「憐憫の情」は、自己保存と並ぶ人間本性の二大原理の一つとして、ルソーの自然状態を平和なものとする要である。もっとも後年、ルソーは「憐憫の情」についての生得的な感情、あらゆる美德の源泉という定義を改め、青年期に発現する感情、しかも人間

の弱さに由来する相対的な感情、と規定し直す。しかし、この変化は彼の中で別の感情が人間を結ぶものとして浮上したに過ぎない。まずは、この変化を追求し、ルソーにおいて、感情が共同性を保ち続けたことを確認するのが、第一の課題である。

次に、ルソーの感情が共同性を保つとして、感情が人間同士をどのような仕方で結びつけるのか、あるいはどのような共同体像を結ぶのか、これが第二の問題である。ここでは、ルソーがまだ共同体構築の意志をもっていた頃の作品から、「新エロイズ」のクラランの共同体のあり方と、「エミール」での教師と生徒の関係を見る。そして、こうした共同体の中で感情がいかに機能するのかを、「自由」の確保という観点から検討する。

ところで、先に挙げたような感情を重視する現代の他者論の

中では、共感や愛が決定的な役割を果たしている。そうした議論では、多くの場合、感情を基盤として、人間が対等なもの前提されているか、対称的な関係へ収束するとされている。しかしながら、ルソーの共同体を「自由」という観点から吟味することで浮かんでくるのは、必ずしも対等な人間関係ではなく、むしろ共感や愛が介する非対称な人間関係である。そこで最後に、ルソーの場合に、何故、感情の共同性から非対称な人間関係が帰結するのかを考察したい。

一 感情の二つのベクトル

ルソーが「不平等起源論」で自然状態を設定した際、人間本性の原理として自己保存のほかに憐憫の情を置いたことは広く知られている。ルソーの自然状態がホッブズとは異なり、平和でありえたのは、この二つの原理が均衡を保っていたからである。ルソーはその憐憫の情を次のように規定している。「あらゆる感性的な存在、とりわけ我々の同朋たちが、滅びたり苦しんだりするのを見て、自然の嫌悪を我々に起こさせるもの」(OI 126)。この憐憫の情は、理性や反省にも先立つ生得的なものである (OI 125-126, 154-155)。そして、憐憫の情は「できるだけ他人の不幸を少なくしつつ、汝の幸福を図るべし」(OI 156) という格率を導くゆえに、人間種の保存の支柱となり、あらゆる社会的美德の源泉ともなる (OI 155)。我々はこのこに、

ルソーが人間を感情的なものとして規定していること、そして感情についても(自己保存という)自己へのベクトルをもつものと、(憐憫の情という)他者へのベクトルをもつものを配していることを見出す。なかでも憐憫の情の規定は、自然状態において既に、人が自分とは違う他者の存在を認め、他者と結びつく共同性をもつことを示している。

だが、この憐憫の情は、自然状態から社会状態へと移行するにつれて、肥大化した自己保存によって圧殺されていく。そのさまをルソーは、次のように述べている。「社会の中で失われた憐憫の情は」もはや……彼らを創造した至高の存在の例に倣って、人類全体をその慈愛の中に包み込むような、幾人かの偉大な博愛主義者の魂の中にしか存在しなくなった」(OI 178 補足と強調は引用者)。しかも、この憐憫の情は、自然状態から社会状態への移行の内でも失墜すると論じられるだけではなく、ルソー自身の規定の内でも徐々にその位置づけを変えていく。

憐憫の情の位置づけの変化は、既に「新エロイズ」のクラランの共同体の内に伺える。ここでは、憐憫の情に厚い「偉大な博愛主義者」に相当する人物が共同体の中心になる一方で、憐憫の情は「人間の弱さの証拠」(NI 193) とされ、愛や共感などと同列に置かれて内的感情 (sentiment intérieur) の一つに格下げされている。さらに「エミール」になると、憐憫の情は、生得的な感情という規定すら覆され、青年期において初めて生じる感情と規定し直される。ここでルソーが与える憐憫の情に

関する三つの格率は、人間の心は自分よりも憐れむべき立場にしか身を置きえないこと、自分自身も免れえない不幸についてのみ憐れむこと、しかもその憐れみは当の他人に対する自分の感情に左右されること、である。つまり、憐憫の情は、対象、機能ともに有限な感情とされたのである。ここに至って、憐憫の情は「自然の秩序により最初に人の心を動かす相対的な感情」(E 505)、「弱さに墮す可能性ゆえに」正義に一致する限りで評価すべきもの」(E 548 補足は引用者)となり、あらゆる美德の源泉という規定は完全に払拭される。

そして、憐憫の情が格下げされた代わりに、新たに生得的な美德の原理という役割を担うことになったのは、良心である。ルソーは良心を次のように規定している。「人間の魂の底には正義と美德の生得的な原理があつて、我々自身の格率に反しても、我々はこの原理に基づいて自分の行動と他人の行動の善し悪しを判断している。この原理にこそ、私は良心という名を与える」(E 598)。しかも、「良心の表れは判断ではなく、感情である」(E 599)。つまり、ルソーにおいては、感情はあくまでも、自己と他者への二つのベクトルを有するものとして、共同体の中で生きる際の善悪の判断に深く関与しているのである。さらに、ルソー自身が毀誉褒貶に晒されて、共同体論を説くことよりも自らの弁護することに力を注ぐようになって、彼が感情に二つのベクトルを配することに変わりはない。そのことは、「存在の感情」という、初期の作『不平等起源論』の

中で既に「最初の感情」とされ(O 165)、最晩年の『孤独な散歩者の夢想』では感情のすべてが収斂するとされた、ルソーにおいて一貫した根源的感情を見ることで明らかになる。

この「存在の感情」について、「ルソー、ジャン・ジャックを裁く 対話」では種々の感受性との関係で次のように述べられている。まず、「ルソー」は感受性を二つに分け、一つは受動的で身体的・有機的 (physique et organique) なものとして自己保存を指し、もう一つは能動的で精神的 (moral) なものとして自分以外の存在に感情を結びつける (R 865) と説明する。このうち後者の感受性は特に他者に関わるものであり、「ルソー」はさらにこれを二分する。「この感受性は、……魂において、物体に働く吸引力と明らかな類似を示します。その力は、我々と他の存在との間に我々が感じる関係によるのであり、これらの関係の性質によって磁石の両極の如く、時には積極的に引力 (attraction) として働き、時には消極的に斥力 (repulsion) として働きます」(ibid.)。引力、すなわち積極的で吸引力的な作用は、自己の存在の感情 (sentiment d'être) を拡張し強化する、自然の単純な働きである。他方、斥力、すなわち消極的で反発的な作用は、他者の存在の感情を圧迫し萎縮させる、反省による複合的な働きである。

つまり、ルソーにおいて最も根源的な「存在の感情」も、「自分以外の存在に感情を結びつける」(ibid.) 感受性の引力と斥力という規定の内に見出される限りで、他者に向かうベクト

ルをもつ。そして、そもそも「存在の感情」が自己保存に関与することからすれば、我々はこの「存在の感情」の内にも、自己保存と憐憫の情の系譜を引く二つのベクトルを見出すことができる。しかも、憐憫の情そのものは社会状態の中で圧殺される運命にあったことを考えれば、ここで語られる他者へのベクトルはいっそう根源的であるといえる。

かくして、ルソーにおいては、人間は終始、感情的なものである。そして、ルソーの感情の規定は徐々に根源的な方向に深まっては行くが、そのいずれのレヴェルにおいても、自己へ向うベクトルと他者へ向うベクトルが等しく設定されている。これは、ルソーの感情が常に他者を前提とし、社会の中で生きる共同性を備えていたことにほかならない。

二 感情における支配の構造

しかしながら、ルソーは、感情を、単に潜在的に、共同性を備えるものと捉えていたのではない。後年、他者との関係構築を断念してしまつたとはいえ、ルソーは長らく実際の共同体を構想し、特に「新エロイズ」では、感情による結びつきを基盤にしたクラランの共同体を描出している。また、善き市民たることを教育に託した「エミール」における教師とエミールの関係の内にも、ルソーの理想とする共同体の雛形を見ることができ

こうした具体的な共同体の中で感情がいかに機能したかを見る際に、指標となるのは「自由」である。ルソーが「平等起源論」で不平等を糾弾したのは、自由こそが生命と同列であるほど人間にとって根源的で価値ある自然からの贈り物であるのに(OL 18)、その自由を不平等が破壊してしまふからである。それゆえ、ルソーは、社会の墮落を、自己保存に基づく素朴な自愛心が自尊心へ変化して他人への支配に移行する点に認め、その結果生じる人間同士の支配隷従の関係を「最悪の事態」(OL 18)と断じたのである。ルソーが「社会契約論」で、一般意志の指揮の下で特定の個人には決して従属しない社会を構想したのも、まさにこの理念に基づいている(OS 36)。したがって、ルソーにおける感情の共同体を検討する際には、共同体の成員たちの自由がいかに確保されたかがポイントとなる。

まず、「新エロイズ」についてである。この物語の中で、クラランの共同体はジュリとその夫ヴォルマルルによって営まれている。この二人についてルソーは、ジュリを愛と感情の人物ヴォルマルルを理性と観察の人として造形し、ジュリに「二人の間にただ一つの魂を作つて、そのうち彼が悟性であり、私はその意志である、と運命づけられているように思われます」(NE 126)と語らせている。もっとも、ルソーの力点はあくまでジュリの側にあり、そのジュリがあたかも「人間全体を包み込むような、偉大な博愛主義者の魂」(OL 178)を体現した人間のように使用人たちを掌握する。そのさまは、ジュリが「こ

の善良な人々に愛情を与えることによって彼らの愛情を得る」

(NH 444) という具合であり、使用人たちはこの愛の授受によって皆が彼女の子供となり一家の一員となる、とされる。彼らはジュリを介して内奥からの愛によって深く結びつき、「全てのことろがただ一人によってなされているように」(bid) 働く。

こうしたジュリの圧倒的な影響力について、ルソーはジュリの従妹クレールに次のように語らせている。「あなた「ジュリ」は支配する (vegen) ように作られています。あなたの支配力 (amphie) は私の知る中で、最も絶対的なものです。人の意志にまで行き渡ります……」(NH 408 補足は引用者)。この「支配」は、共同体の成員たちを自己の利益ではなく共通の利益を指すように仕向けるという理由で、あくまでも肯定的に語られている。しかし、この「支配」は、実のところ、愛の授受のみによって果たされるような単純なものではない。

というのも、この「支配」が円滑に働くために、まずは使用人たちが、誠意のあること、主人を愛すること、主人の意志どおりに仕えること、という条件に従って、予め選ばれているからである。つまり、誰もが共同体の成員になれるわけではない。さらに、この「支配」の内容が、使用人たちが互いに愛し合うこと、しかも、特定の男女の間に交流が生じないことを目指すものだからである。その上、この目的のために採られる方法は、掟という明示的な仕方では使用人たちの反感を煽るのではなく、「そんな配慮があるとは見えないようにして、

権威そのものよりもっと有効な慣習を作り上げ」(NH 449)、男女が会うという「機会も気持ちももたないようにする」(bid) というものである。このことは、「主人の技術とは、この拘束を快楽もしくは利益のヴェールの下に隠して、彼らに強制されているすべてのことを自ら望んでいると思わせることです」(NH 453)、と語られている。そして、使用人たちは、主人の隠れた意志を「自分自身でこれが最も善い、最も自然だと考えて」(NH 450) 実行することになるのである。

こうした「支配」は、「信頼と愛情に基づいている」(NH 450) と言われ、主人が使用人たちのことを本気で思いやっているとという理由で正当化されている。つまり、あくまでもルソーは、この共同体の「支配」を善きものと考えているのである。

次に「エミール」での人間関係に眼を移すと、さらにこの「支配」の内実が明らかになる。ルソーは自分自身に教師に相応しいあらゆる資格を付して、生徒「エミール」の教育を企てる (E 266)。他方、エミールは、普通の精神と健康な肉体をもつ、金持ちの孤児と設定されている (E 267)。その上で、エミールの教育にあたって重要なことは三点、すなわち、自然に従い自然の邪魔をしないようにすること (E 247)、教師がエミールと分かち難い愛で結ばれること (E 267)、そのために「よく規制された自由 (la liberte bien reglee)」を用いること (E 268)、である。こうした目標と方法に従って、エミールは、教育が自然を追い越すことがないように常に配慮されながら、段

階を踏んで教育されることになる。

まず、エミールが幼少の場合である。その教育方針は、「子供に其の自由を与え、支配力を与えず、物事を自分でさせ、他人に求めないようにさせることである」(E 200)。もし、エミールが大人の気を引いて自分の意のままに「支配」しようとするならば、彼の気を紛らわせて防がなければならぬ。その際、肝要なのは、「子供の気を紛らわせようという意図に子供が気づかないこと、人が自分のことを気に掛けているとは知らずに子供が楽しむこと」である(E 202)。また、人生の第二期である子供時代では、ルソーは教師に次のように説いている。

「生徒が常に自分を主人だと思いがら、あなたが常に主人であるようにせよ。自由な見掛けを保った隷属(sensitiveness)ほど完全な隷属はない。そうすれば意志自体をも弱にできる」(E 303)。それに対して、生徒は「何の心配もなくありのままの自分を見せるだろう」(E 303)と期待されている。

同様のことが、成長の第三期、エミールが一二三歳の折にも説かれ、そこでは、ルソーが教師に付した資格も垣間見られる。「……たえず子供を観察し、その動静を伺いながらも、それを子供に悟られてはならない。彼の感じることを全てを予め感じ取って、感じてはならないことを封じ、さらに、彼が自分は物事の役に立つと感じるだけでなく、自分のすることがどう役に立つかを十分理解した上で、喜んでそれをするようにさせなければならぬ」(E 401)。ここで描かれる教師は、まるで全

てを見通す神のようである。そして、この時期、生徒を人間として完成させるために残されるのは、「人を愛する、感じやすい存在にすること(un air aimant et sensible)」(E 401、強調は引用者)のみとなる。

実際、青年期に入って生徒と教師が同列になると、愛情による絆がいつそう効力を増す。ルソーはその事態を「あなたは、彼が気づく前に、彼の心の周囲に何と多くの鎖を張り巡らせたことか」(E 521)と述べている。重要なことは、この「愛情の鎖」が偶然の結果としてもたらされたのではなく、あくまでも効果を見通した上で、しかも生徒にはその意図を隠して仕掛けられたことである。「彼を従順にするために、完全に自由にさせておけばよい、彼にあなたを探させるために、あなたは姿を隠しておけばよい」(E 522)。

もっとも、エミールが成人すると、教師は、これまでの態度を一変させ、一人の友人として、これまでしてきたことをすべて生徒に報告しなければならぬ(E 529)。しかし、こうした告白はむしろ二人の絆を堅固にする、と教師(ルソー)は言う。「……私は、彼を見かけ上は独立させているが、彼がこれほど私に従属した(sensit)ことはかつてなかった、というのも彼は自分で望んで従属しているからである」(E 521)。これが、二〇年の教育の成果である。さらに、教師はエミールにソフィーを与えて愛を育ませておいて、彼女が死んだ、と嘘をさえつく。これは、すべてのものがこの世を去るといふこと

をエミールに教え、失うことを恐れさせないため、と説明されてはいる (E 210)。だが、この逸話に至っては、エミールの最も大切な感情である愛情すらもが担保に取られ、規制されているといっても過言ではあるまい。つまり、愛情の続く限り、自由の規制は半永久的に続くのである。

ルソーの教育はこうした愛による自由の規制によって果たされる。そして、こうした「支配」は、ルソーが自由の規制を、し教育を成功に導く方法と信じる限り、善きものとして正当化されるのである。

かくして、「新エロイズ」の共同体運営においても「エミール」の教育においても一貫しているのは、主人や教師が、共同体の成員や生徒を愛情によって導くこと、その実、自らの意図をその愛情の裏に隠して彼らを思いのままに操縦することである。クラランの共同体の成員や、生徒たるエミールの側から言えば、ジュリや教師の意のままに導かれ、操られているのであり、それを自由と言い得るかは甚だ疑問である。彼らは自由だと思込まされているに過ぎないのである。その意味で、ルソーがジュリのことをクレールに「あなたの支配力は卓抜している」と言わせたとき、この「支配」という言葉は非常に意味深長である。つまり、愛情とは何よりも他者の自由、しかも意志と感情の自由までも縛る支配の鎖なのである。こうした愛情とそこに潜む支配によってこそ、「不平等起源論」で目指された理想的な小さな共同体 (OI 111-112) が果たされるのである。

三 感情における自他の非対称性

しかしながら、ここにおいて、ルソーの感情についての問題点が浮かび上がってくる。何故、ルソーにおいては、クラランの共同体の使用人たちやエミールが自由を阻害されている、と言われないのだろうか。逆に言えば、何故、ルソーは常にジュリや教師の側に身を置いて、その「支配」を正当化するのだろうか。この問題を検討するためには、ジュリや教師に与えられた性質を分析してみなければならぬ。

まず、ジュリである。彼女を共同体の支柱たらしめているのは、その豊かな感受性と普遍的な心情、憐憫の心の深さ、そして愛の能力の卓越性である (NH 73, 262)。彼女は、こうした内的感情を指針として過たず行動する (NH 257, 356)。注意すべきは、この内的感情に深さ、鋭さ、豊かさ等の形容が必ず付されて、個人差があることが明記され、しかもジュリがそれに秀でているという点である (NH 92)。

次に、教師はどうだろうか。ルソーは「エミール」の中で、教師の資格について具体的な内容はほとんど述べず、冒頭で「私自身、その資格を全て授かっていると仮定する。この書物を読むうちに、私が自分に対していかなる恩恵を付したかがわかるだろう」(E 265)と語るのみである。実際、教師は、人間

として完成され (E 325)、愛されるべき (*fidit*) 有徳で善良な人間であること (E 339) 等、極めて理想的な人物と描かれるばかりである。

だが実は、この理想的な人間の具体的な内容を知る手がかりはルソー自身の自伝的著作の内にある。というのも、教師としてルソーが想定しているのが彼自身だからであり、しかも彼は自らを、理想とする自然人 (R 285)、「人間の内で最善の者」(CO 52) であると任じているからである。そして、ルソーの具体的な自画像として描かれるのは、「感じやすい心 (*un cœur sensible*)」をもった (CO 2)、激しやすい (CO 113) 人間像である。彼は自身を次のように描写する。「このように「神によって」特別に造形された人間は、必然的に、普通の人間とは違った仕方です。自らを表現するに違いがないのです。そのように大きく変容した「卓越した」魂をもつ人々が、自分たちの感情や思考の表現の内に、それらの変容の痕跡をもちたらないことにはありえません。この痕跡は、このような存在の仕方を全く知らない人々には見逃されるとしても、それを知り、その人自身が変容を受けているような人々に見落とされることはないのです」(R 672 補足は引用者)。そして、この痕跡とは、その人物を指し示す「隠れた原理」あるいは「しるし」であり、情念そのものを指している (R 672 682)。

こうして、ジュリヤ教師 (ルソー自身) は、卓越した人間として描かれる。これはルソーが自然的・肉体的不平等を認めて

いるがことと合致するが、その卓越性は、何よりも感情や情念の内にも見出される。だが、問題は、この感情や情念の卓越性が、ルソーにおいては、そのまま人間の善性にスライドすることである。何故、感受性の豊かさがそのまま善性に繋がるのか。

考察の手がかりは二つある。一つは、ルソーが、自然状態の墮落を、自愛心が自尊心に変化した地点に認め、その自尊心が他者を支配したい、他者に優越したいという欲求を生み、人間の内面と外面を乖離させ、外面を装わせるようになった事態に認めていることである (OI 174)。その上で、ルソーは次のように述べる。「自然からの最初の衝動は常に正しいことを確かな格律として示そう。人間の心の内に生来の不正は存在しない」(E 333)。つまり正しきとは、自然状態でそうであったように内面と外面が一致し、内面がそのまま表出されることなのである。

さらに、もう一つの手がかりは、ルソーが他者との関係を構築する際の癖である。「私の欲求の第一のもの、最大最強のもの、最も抑えがたいもの、それはまるごと私の心の内にある。つまり、親密な交際、それも可能な限り親密な交際への欲求である。……同じ肉体に二つの魂が宿るのでなければならず、さもないと私は常に空虚を感じる」(CO 414)。ルソーは、この欲求に基づき、他者の自己に対する好悪を測り、「魂の共感 (*sympathie des âmes*)」(CO 52) の強弱・印象 (*impression*) が感

受性に刻印されるや否や、一気呵成に自己と他者の内的感情を満たす「透明な」愛情関係に向かおうとする。他者との完全な一致を目指すルソーにとって、重要な価値は何よりも「率直さ (franchise)」である。この「率直さ」こそが、他者に対峙した際に、最初に気に掛けるべき善性の指標となるのである。それゆえ、ジュリヤルソーのように卓越した感受性をもつ人間は、自然人であるがゆえに内面と外面を乖離させることなく、その内面がそのままストレートに他者に強く刻印されるがために、卓越した「善人」となる、という仕組みである。

こうしたことを踏まえ、この節冒頭で問題にした、ジュリヤルソーの支配の是非に戻ろう。ルソーによれば、確かに、「人間は、……本来互いに平等である」(OI 123)。しかし、「自由は、……それに慣れている丈夫な体質を養い強化するには相応しいが、それに合わない弱くて過敏な体質を圧倒し、破壊し、陶醉させてしまう。一旦主人に慣れた人民たちは、もはや主人なしの状態ではいられない。もし束縛 (Ois) を振り払おうと試みれば、彼らはいっそう自由から遠ざかってしまう」(OI 112-113)。このような留保を自由に認めるならば、他人の自由を侵して主人たろうとする人間がいたとしても、「人間は憐憫 (compassion) という内心の衝動に少しも逆らわない限りで、他の人間に対して……決して悪事をなさないだろう」(OI 126)と信じられる限りで、是認されることもありうる。まして、ルソーにおいては、感受性の豊かな人間は憐憫の情に厚い

と保証されているから、そうした人間が主人となるのに何の問題もない。そして、感受性の生来の非対称性は、そのまま善悪の非対称、さらには人間関係の非対称性に帰着するゆえに、感受性の卓越した者による支配は正当なものと考えられるのである。⁽¹⁰⁾かくして、ルソーの共同体は、「不平等起源論」の冒頭で述べられた、すべての個人が互いに知り合いであり、悪徳がなく美德が賞賛される国家のごとき、閉じた共同体となる (OI 122)。ルソーは、共同体の成員を予め注意深く選ぶことを経て、感情を基盤とした理想的な共同体を成立させる。ただし、この共同体の中では、感受性に卓越した者が、すなわち善なる自然人として、他の人間の自由に対して支配力を行使することがその要となっている。ルソーの閉じた共同体の中で機能しているのは、この感受性の卓越した神のごとき者による隠れた支配であり、それを指してルソーは平和で自由だと称するのである。

注

* ルソーの著作からの引用箇所と参照箇所の略号は以下の通り。括弧内は著作公刊の年(ただし、「告白」「対話」「夢」については著作成立と推定される年)。

OI: *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, *Œuvres complètes*, III, Gallimard, 1964. (1755)

NH: *Juite, ou La Nouvelle Héloïse*, *Œuvres complètes*, II, Gal-

imard, 1964, (1761)

CS : *Du Contrat social, Œuvres complètes*, III, Gallimard, 1964, (1762)

E : *Emile, Œuvres complètes*, IV, Gallimard, 1969, (1762)

CO : *Les Confessions, Œuvres complètes*, V, GALLIMARD, 1964, (1770)

RJ : *Rousseau Juge de Jean-Jacques Dialogues, Œuvres complètes*, I, Gallimard, 1959, (1775)

RP : *Les Reveries du Promeneur Solitaire, Œuvres complètes*, I, Gallimard, 1959, (1778)

- (1) これらの議論については、拙著「感情から他者へ——生の現象学による共同体論——」（明書房、二〇〇四年）を参照されたい。
- (2) 予稿で示した、感情が切り結ぶ非対称な人間関係についてのルソーとレヴィナスの比較は、紙幅の関係で別の機会に論じることとした。
- (3) 「人間の最初の感情は自己の存在の感情 (sentiment de son existence) であり、そして、それが最初に配慮するのは自己保存であった」(OI 164)。
- (4) ルソーにおいて、徐々に憐憫の情が解消され、存在の感情に収斂していくことについて、詳しくは、拙論「『憐憫の情』から『存在の感情』へ——ルソーの感情論——」（『シェリントン年報』第一四号、二〇〇六年、一九—二八頁）を参照されたい。
- (5) ルソーは、「『不平等起源論』の中で、動物と人間との違いを自由な意志に求め、「この自由の意識の中に、人間の魂の霊性が現れる。……意志する、あるいはむしろ選択するという力の中に、そしてこの力の感情の中には、……純粹に霊的な行為だけが見出されるからである」(OI 142)と述べている。
- (6) 「『社会契約論』に見られるような、憐憫の情や愛に基づく共同体と対比される、自己保存に基づく共同体については、前掲拙著の第三部、第一章「二つの共同体とその限界」の第三節「『社会契約論』における共同体」（一八二—一九九頁）を参照されたい。
- (7) ルソーは子供を教育する際の教師を三種類挙げ、それを人間、事物、自然としている。なかでも自然は、人間の力では動かしようがないため、これに従うべきである、というのがルソーの教育の根本姿勢である (E 247)。
- (8) 無論、ルソー自身が子供を捨て教師とはならなかったことは事実であり、彼は自分の弱さや矛盾 (CO 123)、激情のままならなさ (CO 36) も十分に承知していた。しかし、まさにそうした好ましくない欠点すらも告白しうる点に、自らの善性を認め (CO 517)、自らのことを愛されるに値する善人であると繰り返し説いている (CO 496 etc., 851)。
- (9) ルソーは「『不平等起源論』で、自然的・肉体的不平等と、道徳的・政治的不平等を区別している。彼が「『不平等起源論』で問題とするのは後者のみであって、前者については、自然によって規定され、肉体または精神の資質の差異から成り立つものと考え、その源泉も、また道徳的、政治的不平等

との関係も問わない(OI 132)。ただ、道徳的不平等が肉体的不平等と同じ釣り合いを持たないときに、自然法に反すると考えるのみである(OI 134)。つまり、ルソーは、自然的不平等を是認しているのである。

(10) その際、愛は、「不平等起源論」で自由が「法の」健全で心地よい束縛」と言われる場合の「法」に相当するものとなるろう(OI 112)。また、強い感受性は「社会契約論」における一般意志に、強い感受性の持ち主は「立法者」に類比的である(OS 384)。

(よしなが わか・岐阜聖徳学園大学)